

近代短歌に現われた子ども  
(十七)



大塚 雅彦

(37) 宮柁二

宮柁二は本名肇、大正元年、新潟県北魚沼郡堀之内町に生まれた。生家は「丸末」と号する書籍商であった。父は「三峽」という雑誌を発行し、文学を好んだ人物といわれ、また、叔父の宮芳平は森鷗外の短篇「天籠」に出てくるM君のモデルという。柁二は昭和五年長岡中学卒業、同七年家業を捨てて上京、新聞配達員、額縁店員、出版社員等を転々した後、同八年四月府下の砧村に北原白秋を訪ね、その門下生となった。同九年宮一家も没落して移住し、横浜市鶴見区に住むに至った。柁二は同十年六月に「多摩」を創刊した師の白秋の秘書として、八月から白秋居に通った。同十四年三月白秋のもとを辞し、六月富士製鉄川崎製

鋼所（のち日本製鉄に合併）に入社した。八月召集令状を受け十一月大陸に出征、中国山西省方面に転戦、十七年師の白秋を喪ったが、十八年九月戦地から帰還、翌年結婚したが二十年六月再び応召、茨城県で終戦を迎えた。復員後、横浜の自宅に帰り引き続き製鋼所に勤務したが、二十五年東京日本橋の本社勤務に転じた。昭和三十五年永年勤めた富士製鉄を退職し、文筆一本の生活となり今日に至っている。なお、昭和五十一年十二月脳血栓で倒れ、爾来療養につとめ、健康が充分でない。

柗二は中学在学中に相馬御風の「木蔭会」の同人で滝沢という人物にすすめられ、同会に入り作歌を始めた。白秋門に入ってからその「多摩」会員としてはげみ、戦場にあっても作歌を廃さなかったが、この戦場詠が後に『山西省』として洛陽の紙価を高からしめるのである。戦後昭和二十二年に「新歌人集団」「東京歌話会」等に加わり、新進気鋭のすぐれた抒情歌人として次第に名を成した。同二十七年に「多摩」は解散されたが、翌二十八年三月柗二は「コスモス」を創刊し、以後その主宰者

として今日に至った。同誌は昭和五十八年八月「創刊三十周年記念大会」を盛大に挙行したが、「アララギ」と一、二を争う歌壇最大の結社として成長している。柗二は昭和三十年四月から「朝日歌壇」の選者となり、今日も続けている。なお、昭和五十八年十一月、日本芸術院会員となった。歌集は『群鷄』（昭21）、『小紺珠』（昭23）、『山西省』（昭24）を始め最近作の『忘瓦亭の歌』（昭53）に至るまでの九冊と青春歌集『若きかなしみ』（昭55）の合計十冊があり、このうち、『多く夜の歌』（昭36）は第十三回読売文学賞を、『独石馬』（昭50）は第十回空賞を受けた。更に昭和五十二年にはその業績により第三十三回芸術院賞を、五十六年には紫綬褒賞を受けている。このほか『新選五人』（昭26）のような合著歌集や、全歌集の類に『定本宮柗二全歌集』（昭31）——第十一回毎日出版文化賞受賞、『完本宮柗二全歌集』（昭46）、『定本宮柗二短歌集成』（昭56）があり、自選歌集『小現実』（昭46）等もある。著書もすこぶる多く、『埋没の精神』（昭30）、『機のチリ』（昭45）、『私の棚の中』

(昭50) のようなエッセイ集、『石梨の木』(昭49) のような歌論集、『雪の里』(昭52)、『忘瓦亭日録』(昭53) のような随想集、『短歌続本』(昭49)、『短歌実作入門』(昭57) のような入門書、『西行の歌』(昭52)、『鑑賞』小倉百人一首』(昭54) のような古典物、『万葉大和の旅』(共著、昭49) 等、多岐にわたっている。

終二の人及び作風の特色をどう把握したらよいであろうか？ 彼は『群鷄』の後記に、師の白秋から「君は暗い」「君は何故孤独なのだ」「君の歌は瘤の樹をさするようだ」と言われたことを書きとどめている。「私は常に不安を曳きつけて作歌して来た」とも述べている。また『小紺珠』の後記にも「私は常に孤独に住んで常に孤立するとき生き方をして来た」とある。彼が「孤独派宣言」というエッセイを『短歌雑誌』に書いた(後に前掲書『埋没の精神』に所収)のは早く昭和二十四年である。その中に「文学というものは、発想の中に抵抗が含まれなければ、自立しないのではあるまいか」「かの人間の弱さを、いかに作家の誠実として抵抗に設定してゆ

くか。そうしたところを通してゆく孤独のたたかいを必要とするだろう」とある。彼を有名にした『山西省』の中に「おそらくは知らるるなけむ一兵の生きの有様をまつぶさに遂げむ」という作品があり、『小紺珠』の中には「英雄で吾ら無きゆえ暗くとも苦しとも堪へて今日に従ふ」という歌がある。

これらの資料を総合して勘考してみると要するに、一人の無名の庶民、苦しみつつ孤独に堪えて誠実に生きる民衆の生き方に徹しようというという態度があり、そこから発するつねに人間性を刻印した詠嘆の深さが、読者をとらえてやまないのではないかと思われる。彼の弟子安立スハルは「英雄の反対の側に立つて耐え忍ぶ勁さ」「生への祈り」ともそれを形容している(「コスモス」昭42・1所載、安立『埋没の精神』をどう考えるか)。上田三四二は、終二の短歌にはつねに「硬質の文学性がある」と言い、「氏は人生を(悔しき)として受け取った。人生とはいかにも口惜しいものではないか。……：悔しみの文学——宮氏の文学をそう呼ぶことが出来るだ

るう」(上田『現代歌人論』昭44・12)と論じている。

筆者などが終二の文学に惹かれる原因もそこにあるらしい。「宮が戦後の日本人としての歩みを敗戦後の復員から始めたように、私の戦後生活の原点はあの戦争の終わった暑い八月であった」と私自身が書いた(「短歌」昭56・8所載、拙稿「たたかひの前と、そののち」)のも、そんな彼の生活感情や作歌精神に共感するからであり、「戦争を観念ではなく自身の身体で確かめて来た作者が、戦後を身をもって体験し、歌人として生きるという、もつとも困難な道を選んだ」(島田修二『宮柙二』昭55・11)彼の生き方にアイデンティファイできる思いが強いからである。

① 生きゆかむ苦しさ知らず陽に灼けし畳のうへに子は眠りをり

② 咳病みて顔の小さくなりし子と妻言へば来て妻と見下す

③ ながらるるごとき感じぞわれの子がわれを心に置かぬ所作する

④ 阿りをいふ子きらひと言ひさしてふと見れば溢るるばかりの泪

⑤ 人を傷めぬよき子になれと中の子の広き額を撫でてをりたり

⑥ 消極の子の生にしもをりをりは光る泪のごときもあらむか

⑦ おとうさまと書き添へて肖像画貼られあり何といふ吾が鼻のひらたさ

⑧ 扱きつつ新聞を鳴らし配りゆく少年の力も見通したまふな

⑨ 馬跳びの子らの遊びを見おろすに馬として待つ子の背の孤独

抄出歌はいずれも私の大好きな佳吟ばかりであり、子どもに対する愛情の溢れた忘れがたい作品ならぬものはない。①は『小紺珠』所収。「周辺詠物」一連の中にある。終戦直後の物心共に苦しく混沌たる日々の中で作られた歌だ。陽に灼けた貧しい家の畳、その上に、これからの長い人生に来るべき生きの苦しみも知らぬげに眠っ

ている子、それを見ている父である作者。

②から④までは歌集『晩夏』（昭26）より抄出。②は「風の夜」一連にある。作者、妻、子と次々に病んだ、と詞書にある。昭和二十年代で、良い薬もなかったのかもしれない。咳を続けて病臥している子——それをやると咳の癒った父母（作者夫婦）が枕辺に来て、「かわいそうに、あんまり咳を続けたので顔が小さくなったねえ」とでも言い交しつつ、見下ろしているのだろう。一読、涙のにじむような作品だ。この一連には「世の生にもっとも拙き親子かと火を熾しつつ俄かに可笑し」という自嘲をベースに包んだ作品もある。③と④は「をさな子二人」一連の中にある。この二人というのは長女草生（昭20出生）と長男布由樹（昭22出生）だろう。子どもというものは時に、全く親の存在など眼中にないような所作をする。それを③の一、二句で「なぐらるるごとき感じ」と形容したのは絶妙の表現だ。④もまた実な巧みな作品だ。子どもというものは時に親におべっかを言うような折がある。子どもなりの屈折した愛情表現の場合

もあり、子どもらしい打算や駆け引きをふくむ場合もある。潔癖な作者は「おべっかなんか言う子は嫌いだ」とやや烈しく言いさしたのである。思いがけない親のはげしい拒絶や怒りに当面した子どもの眼には、見る見る溢れるばかりに涙が溜ってゆく——そんな情景が眼に見えるような歌だ。極めて具象的にヴィヴィッドに描かれ、しかも一首全体に凜とした緊張のリズムがあり、「名詞止め」がえもいわれぬ効果を發揮していて、愛誦に堪える調べである。

⑤から⑦までは歌集『日本挽歌』（昭28）より抄出。⑤は「冬竹群」一連にある。終二には一男二女があり、「中の子」というのは前述の長男布由樹（ロシアの作家オネーギンからとった名）である。高雅な作者の心情と、聡明そうな額の広い息子の風貌がしのばれるような作である。⑥は「草生入学」二首中の一首。どちらかという子引込思案で消極的な少女だったのだろう。そういう子どもの生にもをりをりは、感情が激して涙を浮べる折のようなものもあるだろうか——と思いやったので

ある。少女に寄せる父親の愛情が硬質な表現で詠出されている。入学を迎えた女童の日々の心のゆれを想像しているのであろう。「涙の光る」などと単純に言わないで「光る泪のごとき」と抵抗のある語法スタイルで述べているのも鋭い。⑦は「長女章生」中の一首。入学したばかりの童女が「おとうさま」と題をつけて父親の肖像を書いた。それが全くひらべったい鼻に画いてある。思わず破顔一笑している作者。下句の間投詞的詠法が面白い。

⑧と⑨は歌集『多く夜の歌』（昭36）より抄出。⑧は「賀歌」で「読売新聞八十周年」の小題がある。同新聞初出の歌だ。朝々、新聞をしごきながら配達してゆく少年の力を忘れるな、と呼びかける作者の心情にうたれる。島田修二は「作者自身は昭和八年ごろ、新聞配達をしていたことがある。へ扱きつつはその体験をも感じさせる、あたたかい表現である」（島田、前掲書）と述べている。⑨は「冬の光」一連にある。作者は冬の昼、二階に一人風邪で臥床していたらしい。フト下を見ると

子ども達が「馬跳び」遊びをしている。馬になって背中を丸めて跳ばれるのを待っている子ども。その背に漂う孤独を感じた眼は、いかにも宮柊二のものである。

### (38) 大野誠夫

大野誠夫は大正三年、茨城県稲敷郡生板村（河内村）に生まれた。父は地主であった。誠夫は旧制龍ヶ崎中学卒業後、はじめ画家を志し熊岡洋画研究所を卒えたが、経済的な理由で断念。その後、全国新聞情報農業協同組合連合会の職員となった。それ以後の職歴のことは、あまり彼は書いていないので、よくわからない。

彼は昭和六年「ささがに」会員となったのが、短歌へ入った最初である。その後、「短歌至上主義」会員となり杉浦翠子に師事した。昭和十九年同誌廃刊後、翠子門を辞し、総合誌「光」に所属。昭和二十一年、常見千香夫・加藤克巳らと「鶏苑」を創刊。翌二十二年「新歌人集団」結成に参加した。二十八年「鶏苑」廃刊後、後継誌として「砂廊」を創刊、三十五年同誌を「作風」と改

題して主宰し、今日に至っている。昭和四十七年以来、熱海市に居住している。彼は「新歌人集団」の仲間たちと共に世に出た第一次戦後派歌人といわれる一人であるが、同集団の最も著名な近藤芳美を政治派・社会派的な歌人とすれば、これに対して風俗派的な歌人として颯爽と戦後歌壇に頭角を現わした。風俗詠に長じ、終戦直後の都会の虚無的で昏迷の街頭風景や世態を、人情風なロマネスクを湛えてうたった。つまり、ロマンと夢を戦後短歌に持ちこもうとしたので、虚構派とも呼ばれた。大野自身はロマン派、風俗派、モダニズム等と呼ばれることに抵抗を感じていたようであるが、戦後生活がにじみ出ている点からいえば、生活歌人ともいえよう。つまり、そこに底辺に生きる民衆の思いが、生活のかなしみを湛えつつ、明日を夢みる希求としてうたわれている。表現は多彩ではなやかであり、時に甘美であるが、一面、やや古風な抒情をも蔵し、古めかしい義理人情趣味のようなものが漂う面もある。

歌集は世評高かった『薔薇祭』（昭26）を始め、『行春

館雑唱』（昭29）、『胡桃の技の下』（昭31）や、最近の『あらくさ』（昭57）に至るまで計八冊ある。また、合著歌集『新選五人』（昭26）に出詠しているし、自選歌集『羈鳥歌』（昭46）もある。『大野誠夫全歌集』は昭和55年刊行された。このほか評論集『実験短歌論』（昭45）、自伝的なエッセイ『或る無頼派の告白』（昭56）や、入門書的な『短歌のすすめ』（昭50）、『短歌入門』（昭55）等の著書もある。

① 隠し持てるパンの破片かけらを暗がりに餓ひもじき子らの争ふらしも

② 幼きら並びて靴を磨きをり孤りの生きのすべなく勁きき

③ 煙草火を借ると寄り来し少年の髭伸びて丸め持つ妖婦伝

④ 草笛を吹き少年は沼のほとりめぐりゆく光る鮒なを刺すべく

⑤ 父われの記憶もいつか薄れゆきさびしさ匂ふ少女とならむ

⑥ 幼子の玩具の電話雨ふれる夜に聴けばしきりに蝸牛を呼べり

①から④までは『薔薇祭』所収。①と②は「いのちの笛」一連の中にあり、③は「柔い焰」一連の中にあるが、いずれも終戦後の荒廃した都会風俗の中におかれた子ども達を、まぎれもなくリアルに描出している。田村泰次郎が『肉体の門』に於いてその頃の街娼たちをクロースアップしてとらえたのと同じように——。①は浮浪児たちであるうか？ ②は「少年靴みがき」であろう。「シューシャインボーイ」と当時歌われた子ども達である。その彼等の、白日の街頭に捨身の生をさらす姿を、開き直って「勁き」と一見見えるような印象としてとらえても、しかしそれは「すべなき」ギリギリの結果なのだ、と作者は自問自答しつつ、心痛んでいるのである。③は風俗小説のひとつまのような凄味がある。④は一転して清冽な作品であり、①②③のような風俗詠的な作品と④のようなういしい作品が同じ歌集の中にあることに読者は戸惑うほどだが、④のように読者の少年

の日の郷愁を呼びおこすような清純な作品もまた、誠夫のものである。私はこの歌に例えばヘルマン・ヘッセの『車輪の下』ワッゲルム・アン・デア・バハに描かれた少年の世界を想い出す。「光る鮎」という一語が強い印象を与える。この歌の前に「唇に草の葉をあてて笛鳴らす少年の群にわれは近づく」という作品もある。

⑤は『行春館雑唱』所収。「誕生日」一連の中にある。誠夫は現在の妻と結ばれる前に二度離婚歴があるが、最初の妻との間に一女があったようで、妻に引取られたらしいこの少女との別れの悲しみをうたった歌が、かなりある。これはその中の一首。⑥は歌集『胡桃の枝の下』所収。「紅梅」一連の中にある。歌意は明瞭で、ほほえましい一首である。

(お茶の水女子大学)